

書道研究誌

# 書の光



Vol.674  
宮城野書道会



漢詩を味わう

第183回

柳氏二外甥求筆跡二首其一 蘇軾

退筆如山未足珍 退筆山の如きも未だ珍とするに足らず

讀書萬卷始通神 書を読む万巻始めて神に通ず

君家自有元和脚 君が家には自から元和の脚あり

莫厭家雞更問人 家雞を厭うて更に人に問う莫れ

退筆の山ができるほど書を書いたが未だ書の神妙に通じていない。万巻の書を読んでではじめてそれが可能となるのである。君たちの家には先祖から立派な書が伝わっているのだから、家にある良いものを顧みずに私の書などを欲しがることはあるまい。

《柳氏二外甥》 柳仲遠に嫁いだ蘇東坡の妹の子二人。

《元和脚》 柳公権の書いた唐の元和年間の書。

《厭家雞》 家に飼っている鶏を良いと思わない。

蘇軾には弟轍が有名ですが、二人の妹もいて、その一人は柳子玉の子、仲遠に嫁いでいます。この詩は、蘇軾の妹の嫁ぎ先の柳子玉の酒宴に招かれて詠んだもので、三十九歳で密州知事になった年の詩です。

前半の二句は書の名句として知られています。蘇軾は、退筆の山ができるほど書を書いたが、まだ書の神妙の境地には達していないと謙遜しています。万巻のさまざまな書物を読み、心を豊かにしてはじめてそれが可能となると言います。

退筆は秃筆と同じ意味で、「退筆山の如し」は書を熱心に学ぶことです。南北朝の書家智永は永欣寺の楼に籠りきって学書に励み、使用した筆がちびると大甕のなかに投げ入れ、数個の甕が一杯になったので退筆を埋めた「退筆塚」を設けたといっています。(宣和書譜)

後半の二句は二人の甥とのやりとりを詠んでいます。蘇軾の二人の甥、柳閱と柳闢は蘇軾の書を欲しがったので、君たちの家には先祖から立派な書があるのだから、わたしの書など欲しがることはない、というものです。蘇軾の妹が嫁いだ柳氏の祖先には唐時代の書家柳公権がいて、劉禹錫詩「劉宗元に酬ゆ」のなかで「柳家新様元和の脚」とその書がうたわれるほど唐憲宗元和時代（八〇六）から有名でした。

「家雞を厭う」は、東晋王羲之時代の故事で、家にあるものより他人のものが良く見えることです。王羲之の先輩の庾翼はその書は王羲之と肩を並べるほどだったといっています。しかし子供たちはみな王羲之の書を学んでいて、庾翼はそれでも平然としていたといっています。

参考文献…岩垂憲徳註蘇東坡詩集卷十一（日本図書センター出版）

醉別復た幾日ぞ 登臨池台に遍し 何ぞ言わん石門の路 重ねて金樽の開くこと有らんと 秋波泗水に落ち 海色徂徠に明らかなり  
飛蓬各自に遠し 且く手中の杯を尽くさん

醉別復幾日登臨遍池臺何言石門  
路重有金樽開秋波落泗水海色明  
但徂飛蓬各自遠且盡手中杯

《大意》 別れを惜しんで酒に酔うことをもう幾日繰り返したことであろう。遠くを見はらすためあちこちの山に登り、下方をのぞみ、池のほとりの高殿も巡り尽くした。これから別れる石門の道で、いつの日かふたたび金樽を開くことがあるなどと、どうして言えようか。秋のさざ波は泗水の川面に立ち、東海のはてまで澄み切った秋の色は、徂徠山に明るく映えて美しい。秋風に漂う根なし草のように、私も君も遠く離れ離れになってしまうのだから、今はただ、別れを惜しんで、手の中にある杯を飲み干そうではないか。(李白詩・魯郡の東石門にて杜二甫を送る)  
※李白四十六歳の時の作。杜甫と山東省一帯をめぐる後、魯郡の東にあたる石門山で、杜甫と酒を酌み交わし別れる時に作ったもの。これが最後の出逢いだつた。

詩情秋水遠く 畫意晚山明なり

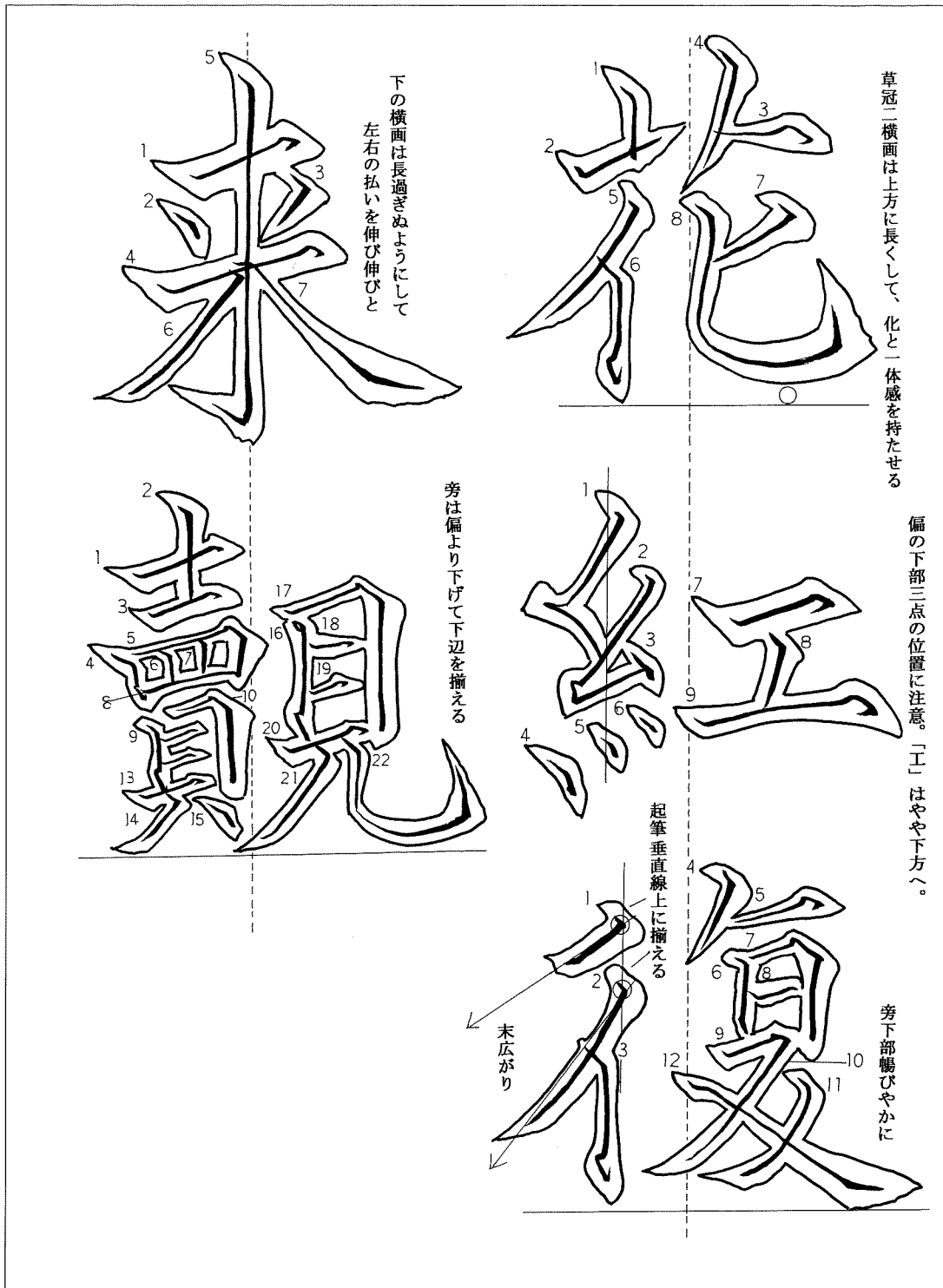
詩情秋水遠 秋波泗水海色明  
畫意晚山明 暮色徂徠

《大意》 詩の趣は秋の水と共に幽遠に、画の心は夕暮れの山と共に明らかである (沈周詩句)

花紅復  
來觀

読み 花の紅なるとき復<sup>ま</sup>た来<sup>ま</sup>たりて觀<sup>あ</sup>わん(明春、花の紅なる時、またお会いいたしましょう。)

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について  
 ・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。  
 ・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。  
 ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「藍田山の石門精舎」

(後半)

朝梵林未曙

朝梵 林 未だ曙けず

夜禪山更寂

夜禪 山 更に寂たり

道心及牧童

道心 牧童に及び

世事問樵客

世事 樵客に問ふ

暝宿長林下

暝に宿る 長林の下

焚香臥瑤席

香を焚きて 瑤席に臥す

潤芳襲人衣

潤芳 人衣を襲ひ

山月映石壁

山月 石壁に映ず

再尋畏迷誤

再び尋ぬるに迷誤を畏れたれば

明發更登歷

明發 更に登歴せん

笑謝桃源人

笑ひて謝す 桃源の人

花紅復來觀

花の紅なるとき 復た來りて觀はん

草書

行書

來 觀  
花 紅 復

來 觀  
花 紅 復

※成家・師範の随意作品出品は一点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書

在 久  
結 交 不

來 蒼  
觀 紅 復

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部		順位		氏名	
<p>ながめやう心もたえぬわたのはら</p>					
<p>八重のしほぢの秋の夕暮</p>					

源 実朝

和泉溪石先生書



佐藤象雲書

音

コロウカブン  
ゲモウトウシヨウ

略解

孤陋は世間から離れて視野が狭いこと。  
寡聞は見聞の狭いこと。  
知識のない愚蒙では人にそしり笑われる。



希夷不測

希夷にして測られず

希夷不測

■ 虞世南・孔子廟堂碑

(初唐・西暦六二九年頃) の臨書

(5)

象雲臨

『希夷不測』

論語で有名な儒教の祖孔子は春秋時代の思想家です。孔子廟は孔子の死後に山東省曲阜に建てられたのが始まりですが、唐時代となり太宗が即位してからは、全国の州県に廟を建てるように指示しています。この碑は長安にある国子監(国立大学)に建てられました。原石は焼失し、現在の西安碑林にあるものは重刻されたものです。碑文の内容は孔子の遺徳を讃え、学校教育の重要性をうたいますが、大半は太宗と孔子と同列に並べてその功績を称賛していることです。

今月の四文字は前回の「玄妙之境(奥深くて微妙な境地)」に続く言葉で、「希夷」とは感覚的にはとらえがたい道理を言います。

義之の子敬に与う

義之の子敬に与う

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書

象雲臨

『義之與子敬』

宋代の米芾の著作といわれる『書史』に「孫過庭草書書譜、甚だ右軍の法有り。作字の落脚、差や前に近くして直なるは、此れ乃ち過庭の法なり。凡そ世に右軍の書と称して此れ等の字有るは、皆な孫の筆也。……」とあります。

唐代で王羲之の書法を得ていたのは孫過庭が第一人者という評価です。さらに「作字の落脚、差や前に近くして直」というのは、孫過庭は筆の軸をやや前方に傾けて筆鋒が手前にくることを言っています。

書譜はしなやかな線が特徴で、連続する曲線が途中で頓挫することなく、収筆まで一貫しています。今月の五文字の「義」の第二画の斜線から連続する線は、線の太さが一定していて、しなやかに円転し筆軸が前方に傾いて筆鋒が活躍していることが判ります。

義之の子敬に与う